

# 戦火に散ったマスコット

10

## 戦前最後の関関サッカー



戦前最後の関関サッカー、昭和18年於千里山グラウンド（関大サッカー部七十年史より）

## 後世につないだ魂のパス

2010年サッカー・ワールドカップ南アフリカ大会に向けて、世界各地で予選が展開されている。平成になって、Jリーグ発足を機に日本でもサッカー熱が高まり、かつては悲願とされたW杯出場も夢物語ではなくなった。サッカーがまだマイナー競技だった昭和、それも初期に、命がけてボールを追った若者たちがいた。戦時下の1943（昭和18）年秋、学徒出陣を前に関西大と関西学院大のサッカー部が、最後の関関戦を行っていた。

（新聞うずみ火・吉岡雅史）

### ライバル対決は観客も熱くさせる

ライバル対決は、当事者が盛り上がるだけでなく、観客も熱くさせる。TG戦しかり、ヤンキースーレッドソックス戦しかり、はたまた朝青龍ー白鵬の横綱対決しかり。

最後の関関戦が、野球の早慶戦のように後世に語り継がれていないのは、メディアの無関心によるものか、それとも時代が悪かったのか。

1923（大正12）年の関西学生リーグ船出と同時に、関大・関学の2校のつばぜり合いが始まった。昭和に入ると京大が台頭して3強を形成した時期もあるが、草創期から牽引したのは紛れもなく関関だった。

しかし1943年に入ると、戦局悪化に伴いスポーツが制限され、リーグ戦も中断。猶予されていた学生の徴兵も中止となり、12月の入営が決まった。

△突然、誰だったか「悔いのないよう、思い切りボールを蹴ってから征きたいなあ」と叫んだ。3年生の南宏芳さんが「どうだ？最後の関関壮行戦をやるうじやないか」提案した。それに呼応してマネージャーの竜元正次君が大声で「ぜひとも実現しよう」と。全員賛成の拍手。

クラブハウスで秋ごろ、このような会話があったことが「関西大学サッカー部七十年史」に載っている。

関学側に異論があるはずもないが、いかんせん戦時中のこ

とである。簡単に認められる希望だとも思えない。しかし、サッカー小僧たちの熱意は実り、11月3日に関大・千里山グラウンドで実現することとなった。

### 「フレール、フレール関学」「関大」のエールを交歓

試合は、前年リーグ戦優勝の関学が、1-0で関大に競り勝った。得点者も、観客数も不明である。辛うじて関大のメンバーが記録されていて、フォワード5人という攻撃的な布陣だったことは分かった。

スポーツが一斉に禁止された時代である。しかも規模の大きい両校の対戦。戦後すぐ関大に入学し、サッカー部OBの中尾博さん（80＝宝塚市在住）いわく「当時は完全なマイナー競技で、リーグ戦でもスタンドはガラガラ。ただ、関関戦だけは盛り上がりましたよ」と話していることから、観客も決して少なくなかったのではないだろうか。

この試合にハーフバックとして出場した長谷川博彦氏（故人）は、のちにこう述懐している。

△無我夢中で走り、蹴り、力と技を出し尽くした。結果は1対0で敗れはしたが、もはや勝負はど

うでもよかった。苦難を乗り越えて関・関の伝統を守り得た満足感



人工芝を敷き詰め、立派な現在の関大グラウンド

と充実感に両校イレブンは無性に涙を流した。肩を組み合つての「フレール、フレール関学」「フレール、フレール関学」を交歓、お互いに武運長久を祈念した。

### 感動の一戦は再度両校が激突

グラウンドの情景が浮かんでくるようだ。ところがこの感動的な一戦は、最後のものとはならなかった。11月中旬に再び、神戸の東遊園地で両校は激突した。

関大が雪辱したのか、関学が返り討ちにしたのか、2戦目の記録は残っていない。だが、再戦が行われたということは、最初の試合

が成功だったからだと思えるのが自然だろう。

さぞや歓喜に包まれたであろう一戦の開催に尽力した関大マネージャーの竜元が、戦地から戻れなかった。竜元はもともと自動車部の部員だったが、裏方としてサッカー部を支えていた。また、当時の現役選手ではないが、43年春に卒業した狩場六郎も空襲の際に、大阪上空で撃墜されている。

### 好きなサッカーを奪われた無念は今に...

一方、「関西学院大学蹴球五十年史」には、戦時中の記述はほとんどなく、辛うじて43年度の新

入部員が3人だったこと、それにこの年ほとんどサッカーは出来なかったVとだけあった。

前述した中尾さんは「この1年ほどの間で、もう私より上の世代はいなくなってしまうので、詳しいことは……。ただ、みんなサッカーが好きだったはずですよ」と、話した。

双方の関係者に、どれだけ戦死者が出たかは不明である。それでも、好きなサッカーを奪われた無念は、理解できる気がする。ただひたすらブレールすることだけを願った彼らの思いが、今に受け継がれていることを、信じてやまない。

# 「おみせい」のヨコシマ日記

